

## 第3ユニット報告 (2)

### イラン・イスラームとの対話、および、神仏習合

永井 晋

ごく簡単に、これまで何をやってきて、これから何をやりたいのかという話をしたいと思います。今、宮本先生に少しお話をいただきましたが、イランのシーア派イスラームとの対話ということをやっているわけですが、後で説明しますように、スンニ派ではなくシーア派だということが非常に重要な点です。まず、なぜイスラームかということですが、イスラームには非常に強力な共生思想があるのです。イスラームは厳格な一神教であり、アッラーは唯一の神ですが、この「一」というのが「グローバル」なわけです。しかし単純にグローバルなだけではありません。世界中の様々な文化・民族の差異を、あるいは宗教の差異を全部なくしてしまって、ただ一つの「イスラーム国」のようなものを作ろうということではないのです。現在問題になっている「イスラーム国」は実際そういうことをやっていますから困るのですが、ああいうもので「これがイスラームだ」というふうに考えてしまうと大きな間違いになります。これはどういうことかといいますと、「一ということがイコール多だ」という考え方があります。イスラームでも特になぜイランかというと、シーア派の中にそのような非常に強力な議論があるからなのです。それは、神秘主義的体験に基づいた共生思想であり、イランを代表する神秘主義者でスフラワルディーという人がいますけれども、彼がそういうことを唱えております。あるいはイブン・アラビーという人がおりますが、彼はスンニ派ですがスーフィー、神秘主義者です。スーフィズムも非常にシーア派に近いことを考えていて、イブン・アラビーの研究というのはほとんどイランでなされているということです。この二人がイスラーム神秘主義の恐らく一番大事な二人だと思うのですが、彼らは何を主張しているかということ、「存在一性論」といって、神アッラーはただ一つである。しかし、そのただ一つのアッラーが無数の鏡に映ったかのような世界構造を考えるわけです。だから一でありながら多である。日本で分かりやすい仏教の言い方でいうと、「一即多」という、華嚴の論理と全く同じモデルがあるわけです。

そのような「一即多」の状態、アッラーが唯一だけれども、その唯一というのは無数の多からなっているということ、無数の多に映されることによって、多様化することによって一であるということ、これは神秘体験から来ている。これがイスラームの一つの考え方だと思うのですが、これはひとつの共生思想です。歴史的にイスラームがかなりの地域を征服した時期がありますが、キリスト教と違うのは、イスラームもいろいろありますので一概には言えませんが、征服した所の文化・宗教を破壊しないわけです。それを生かしておく、共生する。なぜかという、先に言いましたように、神はアッラー一人しか居ないわけですから、どんな神を崇拜しても、結局はそれを通してアッラーを崇拜しているということになるわけです。これは強力な共生思想で、ここで問題になるのはアッラー、「一」ということをどう考えるかです。この話になると本当に時間が長くなってしまうのであまり深入りしませんが、われわれがイラン・イスラームとの対話の中で考えていることは根本的にはそういうことなのです。

このような「一即多」的な神秘主義に支えられた共生思想を持っているイラン・イスラームとわれわれはどうやって対話をしていくかということを手探りでやっているわけですが、これは実際大変なことです。イランも現在は体制が変わって穏健派になりましたけれども、その前まではアメリカと対立して北朝鮮のような位置にあり、そのためにイランというだけで非常に暴力的な、危険なイメージがありました。しかし本当にそうなのか。このような柔軟な共生思想を持ったイスラームととにかく対話してみないといけないのではないのか。この交流のイラン側の中心人物はアブドッラヒーム・ギャヴァーヒー先生という方で、この方はイラン革命の後で最初の日本大使になった方です。非常に高名な方で、日本で勲章をもらったりなどした方です。彼は、特にアメリカを通さないイス

ラームを知ってほしいと、日本でそういう話をされています。既にわれわれは2回会議をしましたが、1回目を東洋大学でやったときも、2回目をテヘランでやったときも、ギャヴァーヒー先生の話はそういうことでした。イスラームと神道の比較をしたりなどして、欧米の目を通さないイスラーム、そのイスラームが持っている平和な共生思想、これを日本人に知ってもらいたいということで、こちらもそれに答えようとしています。非常に難しい作業ですから、少しずつ対話を重ねていってそのようなイスラームの共生思想とわれわれの実体験をすり合わせていく、そういうことをやっている段階です。

まず2012年の11月に東洋大学で行った第1回のシンポジウムです。全体のタイトルは「共生の哲学に向けてーイラン・イスラームとの対話ー」。イラン・イスラームとの対話、もう少し細かく言うとシーア派です。この第1回のシンポジウムで、今言いましたギャヴァーヒーさんが「イスラームと神道の対話：文化的相互理解と協力のための礎」という話をされましたが、彼は日本大使をやり、政治の世界にずっと居る人ですから、かなり実的な話でした。このシンポジウムでは4人のイランの方々をお呼びして、日本人の研究者がそれぞれにコメントを付けるという形でプログラムを組んだのですが、2番目の森瑞枝さんという方、これは専修大学と国学院大学で非常勤をされている、神道・国学の専門家で「本居宣長の「漢意」批判」ということをなさいました。ギャヴァーヒーさんの神道理解はそれほど深くないので、この二人の議論はあまりかみ合いませんでしたが、その次のフェイラーヒー先生というテヘラン大学准教授、この方はシーア派の僧侶ですから、1回目のシンポジウムの一つの目玉でした。最初の予定では、アーヤトッラというイスラーム・シーア派の最高指導者のうちの1人が来るはずだったのですが、直前でキャンセルされて来られませんでした。超大物は来ませんでした。僧侶で神学者のダヴード・フェイラーヒー先生が来られて「現代イスラーム：御言葉と学問の間」という話をされました。これは神の言葉と歴史上のイスラーム共同体を支配する法学との間の関係についてです。神秘主義と法学というのは非常に密接な関係にありますから、その辺について非常に細かくイスラームの法について話をさせていただきました。それに対するコメントとして井筒俊彦先生のお弟子さんである黒田壽郎先生が「イスラームと共存の可能性：仏教との比較の観点から」という話をされました。これは現在のグローバル民主主義、欧米式のグローバル民主主義に対してイスラームから一つの提言を行ったもので、仏教も視野に収めて、欧米とは違うモデルを提示したものです。次のビジャン・アブドルカリミー先生、この方はイラン・イスラーム自由大学准教授です。この方はハイデガー研究者ですが、



写真1：国際シンポジウム「共生の哲学に向けてーイスラームとの対話ー」総合討論（2012年11月）



写真2：イラン研究集会（於 Academy Science、テヘラン）（2013年11月）

「比較哲学の重要性と必要性」という話をされ、これもハイデガーとイスラームを比較しながら比較哲学の新しい形態を出したものです。東京大学の鎌田繁先生がそれに答えられて大体同じテーマで話をされました。それからハサン・セイエド・アラブ先生、この方は、Encyclopedia Islamica というテヘランの図書館の主任をされている方で、コルバンとスフラワルディーの関係について話されました。先に触れましたスフラワルディー、イランのシーア派神秘主義の一番重要な人、これとフランスのイスラーム学者であり哲学者であるアンリ・コルバンの関係です。コルバンというのはハイデガーとシーア派の神秘主義を使って一つの新しい考え方を出した人ですから、彼の現代の哲学と中世のスフラワルディーのイスラーム神秘主義との対話が主題になりました。それに対して東京大学の小野純一さんがスフラワルディーの現象学的な解説をされました。そしてもう一回アブドルカリミー先生がハイデガーとコルバンの関係を話され、私がそれに対するコメントとしてコルバンの現象学について話をしました。これ（写真1）が1回目のシンポジウムの内容になります（成果は『国際哲学研究』別冊3に収録）。これがそのときの写真で、最後の総合討論のところです。

そしてこれ（写真2）が第2回目になります。これは去年の11月にわれわれのほうでテヘランに行っていきました。これはイラ

ン・アカデミーサイエンスというイランの学問の一つの中心になっている非常に重要な所なのですが、ここで会議をやりました。最初のあいさつがあり、次いでアカデミー・サイエンスの所長であるアルダカニ博士がイランで歴史的に西洋哲学がどのように受容されたかというテーマで話されましたが、ほとんどされなかった、あるいは極めて遅れて受容されたということです。ペルシャは世界の中心なので西洋哲学など必要ないということではなかなか受容されなかったという、われわれにとってはなかなか驚くべき話でした。そしてアーワーニー先生、この方は井筒俊彦先生のお弟子さんで、イランのイスラームの歴史、哲学の歴史をたどりながら、これも比較哲学のようなお話でした。それから私が西田幾多郎の話をし、ギャワーヒー先生がもう一回文化の共生について話され、それから堀内俊郎研究助手が「初期仏典に学ぶ共生の知恵」というタイトルで初期仏典から共生思想を取り出すということをされました。閉会の辞だけダーマードさんというシーア派のアーヤトッラが述べられましたが、彼は前回直前にキャンセルした方で、今年（2014年）の12月に行われる第3回のシンポジウム（12月13日、国際シンポジウム「共生の哲学に向けて：イラン・イスラームとの対話—井筒俊彦の共生哲学—」）には来る予定だったのですが、また残念ながら来られなくなりました。

少し写真を見て頂きます。Encyclopedia Islamica という図書館です（写真3）。東洋大学の図書館と交流したい、大量の本を寄贈すると言っており、まだ実現していませんが、そのような可能性があります。これ（写真4）はボジュヌールディー先生とムシュタバイー（Mujtabai）博士です。ボジュヌールディー先生は12月に来日される予定ですが（体調の都合でキャンセルとなった）、このお二方も井筒先生の薫陶を受けられた方々です。さらに、シンポジウムと並ぶわれわれの今回のもうひとつの大きな目的が、ダルーシュ・シャイエガン（Dariush Shayegan）先生という哲学者、思想家の家を訪問することでした（写真5）。彼は日本ではほとんど知られていませんが、イランとフランスでは非常に有名な思想家です。イランでもたいへん尊敬されている。現代イランの、革命前の西洋社会と革命後のイスラーム体制とのある種の「共生」として面白かったのは、シャイエガン先生は完全にパーレビ時代のタイプの知識人です。西洋式の素晴らしい家に住んでおられ、西洋時代は良かったというわけです。しかし実際にテヘランに行ってみると完全に西洋社会です。イスラーム革命で何が起ったのか分からないぐらいの西洋社会で、パーレビ時代の空気が濃厚に残っている。そしてシャイエガン先生のような方がまだテヘランに居られ、彼は革命後のイデオロギーには全く興味がないヨーロッパ式の知識人です。ずっとフランスで教育を受けて、パリとテヘランを行き来している西洋型の知識人の典型のような人です。ちなみに、今回のイラン訪問の後に私だけ数日残り、元テヘラン大学教授でハイデガー研究者であるエフサン・シャリーアティーさんという方（2014年12月のシンポジウムに招聘した）に会って話をしたのですが、彼の父親はイラン革命の代表的なイデオログで、何らかの理由で暗殺された、イランではたいへん有名な方です。彼のような革命派の知識人が反革命派のシャイエガン先生と同じテヘランでごく自然に「共生」していることに、イランの奥深さというか、共生思想を目の当たりにしたような気がいたしました。

その後、ペルセポリスやヤズドという所に行きまして、ヤズドではゾロアスター教の寺院を訪ねました（写真6）。ゾロアスター教もイスラーム・シーア派とある種の共生関係にあり、シーア派の中



写真3：Encyclopedia Islamica（2013年11月）



写真4：Bojnurdi 博士と Mujtabai 博士との会談（2013年11月）



写真5：シャイエガン（Dariush Shayegan）博士との会談（2013年10月）





写真6：ヤズドのゾロアスター教会（2013年11月）



写真7：アルメニア人教会（ヴァーンク教会、於イスファハーン）（2013年11月）



写真8：シンポジウム「共生思想としての神仏習合」（2013年12月）

で、地位は低いながらも生き残っているということです。ゾロアスター教は拝火教とも言われるように火を拝みますが、この寺院の火は12世紀からずっと絶えることなく燃やし続けられているということで、これが一種のご神体のようなものになっています。最後に、これ（写真7）はアルメニア教会です。アルメニアのキリスト教はマイノリティーですが非常に優秀な技術者がたくさん居り、彼らが技術を提供する代わりにイランが彼らの宗教を保護したということです。エルサレムにもアルメニア派教会はありますが、それよりも規模が大きく、非常に特殊で興味深いものでした。これもイスラームの社会の中でそれなりに認められていおり、イスラームの共生の一つではないかと思えます。

われわれのもう一つの活動について次にお話しします。これはイランとは関係ないのですが、先ほど宮本久義先生もおっしゃった「土着」ということに関係します。日本において「土着」から「共生」を考えるときにわれわれが考えたのは「神仏習合」ということです。まさしく先のゾロアスターとイスラーム・シーア派との関係と同じようなものとして、日本には神仏習合があります。これを共生思想としてきちんと考えてみようということで専門家を3人お招きしてお話を伺いました。最初は早稲田大学非常勤講師の門屋温先生で、この方は神道研究の若手のホープです。非常に優秀な方で、「神仏習合が神道を再生する」と考えておられます。次に鎌田東二先生、この方は多方面で非常に有名な方です。現在京都大学の「こころの未来センター」というところに居られ、『神と仏の出逢う国』という著書に代表される独自の神仏習合を現代の思想として考えておられます。それから日文研（国際日本文化研究センター）の末本文美士先生ですが、彼はまさに神仏習合を哲学的に考えたいということですからずっと研究しておられますから、その話をさせていただきました。これ（写真8）がその様子です。かなり盛況で非常に面白い議論ができたのですが、いわゆる専門的な議論というよりも一般の人が分かるような非常に分かりやすい言葉で、しかも深い内容で話

ていただき、大変いい会だったと思います。

今後の計画としては、イランとの交流を軸にして今お話ししたようなことを継続し、対話を深めてゆくことを考えております。